集落活動と集落支援の創発
－福知山市夜久野町西垣地区の取り組み－

中島頼孝*1 ・ 小野田豪介*2 ・ 松宮　朝*3

1. はじめに[1)]

2014年度から綾部市を中心とした＜地域生活文化圏＞の地域活性化をテーマに共同研究がスタートした[2)]。綾部市を中心とした＜地域生活文化圏＞とは、中丹地域（福知山市、舞鶴市、綾部市）を想定しているが、本稿ではその中でも福知山市夜久野町の集落活動と集落支援に注目している。その理由は、米山俊直の「小盆地宇宙」の事例として「綾部・福知山」がまとめて位置づけられていた（米山，1989；安藤，2012）ように、中丹地域としてのまとまりを見ていくこともあるが、それ以上に、福知山市夜久野町の特色ある集落支援のとりくみに対して、共同研究の主眼におかれた「地域固有の生活原理として示される＜地域イデア＞」を見いだすことができるのではないかと考えたためである。

本稿は、2014年10月4日に同志社大学で開催された「地方の社会的解体危機に抗する『地域生活文化圏』形成の可能性」研究会での、福知山市夜久野町西垣地区自治会を中心に活動された元自治会長の中島頼孝氏と、同西垣地区に居住し、福知山市の集落支援員として精力的に活動を展開する小野田豪介氏の報告に基づき、夜久野町における集落活動と集落支援の現状をまとめた中間報告である。

ここであえて、完結していない調査研究の中間報告を示すのにはいくつか理由がある。1つは、「『当事者』の声から学び、それをモデルとして押しつけることなく、その地域の『当事者』に合わせる形で対話を続けるという研究のプロセス」（松宮，2010）から考え、「住民が『地域問題』を意識し自ら定義していく速度にあわせて（あるいはそれを促すようなかたちで）研究をすすめる」（新原，1991：30）という方法論的な関心に基づくものである。

こうした方法論的な課題と関連するもう1つの理由は、近年の農山村をめぐる議論が、あまりにも地域の取り組みに対して拙速に「成功」／「失敗」の評価を下そうとする傾向を持つことに違和感を覚えるためである。これは、地域活動の展開プロセスではなく、人口や経済諸指標などによって外在的に評価し、その方向性を議論する動きへの違和感である。

この点に関して、事例として取り上げる中丹地域（福知山市、舞鶴市、綾部市）をめぐる近年の動きから考えてみたい。綾部市は、2010年から2040年までの間に「20～39歳の女性人口」が5割以下に減少する市区町村である「消滅可能性都市」（増田編著，2014）に位置づけられた。福知山市の場合、「消滅可能性都市」とはされなかったが、隣接する綾部市が位置づけられたこともあり、大きなインパクトを与えたことは間違いない。小田切（2014：10－14）は、地方消滅論への反応を、「農村たたみ論」、「制度リセット論」、「諦め論」という3つ分類するが、いずれも「消滅可能性都市」と名指された地域の意欲がそがれてしまうことが危惧されている[3)]。

その後、地方消滅論の流れを受けつつ、一転して地方の潜在能力を謳う日本創成会議の第二弾が2015年6月に発表された[4)]。これは、「東京圏高齢化危機回避戦略」と名付けられたものであり、高齢化が進行し介護施設が2025年に13万人分不足するという推計結果をもとに、「医療介護体制が整っている41圏域」を移住先の候補地をリストアップしている。近畿圏では和歌山市とともに福知山市がリスト入りしている。

このように、ここ2年ほどの間に、「地方消滅」という危機が煽られたり、その真逆のベクトルを持つ大都市からの高齢者受け入れにおける地方の可能性が提唱されているのだ。いずれにしろ、「選択と集中」により地方の消滅をやむなしとする言説と、逆に、地方の発展を地域の自助努力に求め、過剰とも言える計画で煽り立てる言説の極端な二項対立図式に翻弄されている姿が浮かび上がってくる。

さらに、2014年11月には地方創生二法が成立し、地方自治体に長期ビジョンと総合戦略策定が要請されることとなった。2015年3月、全国第1号の京丹後市の人口ビジョンでは、3割以上の人口増という、一見すると過剰にも見える予測（増田・冨山，2015：12）がなされた。この京丹後市は綾部市、福知山市よりもさらに北部に位置し、「消滅可能性都市」とされた自治体である。これが現実的に可能なのかはおいておくとしても、地方創生に向け、「地方消滅」を避ける激しい計画策定が強いられている姿を見てとることができるだろう。

こうした地域においては、個性や多様性によってその独自の展開を目指すことが求められるが、結果として地域の側の自己責任を強いるものとなっているといえよう（原山，2009）。であるならば、こうした動きに巻き込まれず、今一度集落レベルの実態から、丁寧にその現状と可能性を探り出す作業が必要ではないだろうか。本稿の目的は、福知山市夜久野町西垣地区の集落活動と集落支援の創発[5]から、この課題にこたえることを目指している。まずは、西垣地区の集落活動の実態から見ていくことにしよう。

2. 福知山市夜久野町西垣地区の取り組み

2-1. 福知山市夜久野町の概要

表1：旧夜久野町人口

年	1960	1965	1970	1975	1980
人口	8,394	7,492	6,716	6,279	6,059
1985	1990	1995	2000	2005	2010
5,828	5,521	5,5198	4,4869	4,453	3,973

出所：国勢調査（2010年は福知山市旧夜久野地区）

福知山市夜久野町は、京都府北西部に位置し、2015年9月現在の住民基本台帳人口は3,705人である。表1に示したように、1960年の8,394人から一貫して人口が減少傾向にある。

この夜久野町は2006年、福知山市に三和町、大江町とともに編入合併となった。この合併をめぐっては、合併前の旧三町で住民投票の直接請求運動が成功し、三和町、大江町では町長リコール運動があった。しかし、夜久野町では住民投票運動は収束したとされる（夜久野町史編集委員会編，2005）。もっとも、合併の影響は、「地域振興会」「地域協議会」が作られないなど一定程度存在し、福知山市として「都市間競争」、「選択と集中」にシフトしているとする評価もある（松下，2010）中で、旧夜久野町としての活性化の取り組みが課題となっている。

表2：夜久野町の年表

年	事　項
1948	丹波漆生産組合発足
1956	中夜久野村、下夜久野村合併→夜久野町
1959	上夜久野村、夜久野町合併
1974	丹波黒大豆作付け開始
1982	天満神社（宮垣）相撲保存会結成→奉納相撲甚句
1984	居母山クラブ発足
1985	「拠点観光地の整備計画等に係る調査報告書（夜久野町）」
1986	観光振興関連事業開始
1987	夜久野町観光協会設立 丹波漆生産組合再構築
1990	夜久野高原「ファームガーデンやくの」整備構想
1992	「丹波の漆掻き」京都府指定無形民俗文化財
1993	第1回「夜久野高原まつり」開催
1995	夜久野町→「夜久野高原ファームガーデン構想」
1997	「三十万人　都市農村交流の町ーやくのの郷ーづくり構想」
1998	㈲「やくの農業振興団」発足
1999	「やくのふる里公社」→「農匠の郷　やくの」開設
2000	「やくの木とうるしの館」開館
2001	㈱夜久野商工振興公社→「夜久野マルシェ」開設
2003	合併協議会設置
2006	夜久野町・福知山市・三和町・大江町の1市3町合併（福知山市への編入）
2012	NPO法人「丹波漆」発足
2013	「畑七つの里づくり協議会」→交流施設「ななっこ」開設

旧夜久野町時代からの地域づくりは、表2に示した通りである。これまでは、主として丹波漆、丹波黒大豆などの特産品開発が進められ、観光の拠点としては1995年から「ファームガーデンやくの整備事業」が展開された。2000年には「やくの木とうるしの館」が開館し、地元の漆をもとにした地域活性化の取り組みが進められている。また、「やくの高原市」は、2006年に年間9,600万円の売り上げにより注目された（古谷，

2008)。

ここでは、旧夜久野町の中でも、特色ある集落活動が展開されている西垣地区を中心に、その動きを見ていくことにしたい。

2-2. 西垣集落の活動

西垣集落の活動について、中島頼孝前自治会長の報告を中心に、その概要を示しておこう。

西垣集落は、夜久野町内の西部、上夜久野地区に属し、集落人口は23世帯、81名である。うち42名が60歳以上という。もっとも、高校生2名、中学生2名、小学生3名、小学生未満3名（2014年10月現在）が居住するため、いわゆる「限界集落」ではない。小野田氏を含むＩターン者も2世帯居住している。

西垣集落では、直見川沿いのなだらかな斜面を農地として活用し、ほとんどの世帯が農業に従事している。西垣地区の魅力については、夏でも気温が低く過ごしやすい、空気がきれい、星空の町[6] であること、食べ物がおいしい（名産はそば、すいか、黒豆、まつたけ、栗など)、近所同士の付き合いが深いことが指摘されていた。

西垣地区では古くから住民の結束が強く、年間を通じて多くの住民参加型の行事が組まれている。鹿や猪の獣害がひどく、共同作業による防獣柵の設置など、切実な問題がある点に注意しておく必要があるが、その結びつきの強さは、下記に示した多様な集落行事からも見ることができる。

＜西垣地区集落年間行事＞

1月　互礼会（1日）
　　※どんどやき（第2日曜）
　　寿初め（成人の日）　もちつき
2月　節分（3日）
　　初午参り（第2日曜）
3月　モータークラブ懇親旅行（50年以上続く、以前は単車、現在はバス）
4月　田圃の用水路の清掃（第2日曜午前中）
　　総会（第2日曜）／お花見
5月　花祭り（第2日曜）
　　春道つくり（第3日曜）
　　茶畑再生活動・茶摘みイベント（最終日曜）
6月　※府道沿い花植え（第2日曜）
　　※「さなぼり」お楽しみ会、研修旅行
7月　河川清掃（第1日曜）
　　夏祭り（第2日曜）
8月　子供会地蔵盆（お盆の頃）
　　帰省の人が集まる
9月　老人会敬老会（第2日曜）
10月　天満神社　秋祭り（第2日曜）　7集落
　　茶畑再生活動・芋ほりイベント（最終日曜）
12月　※府道沿いジャンボ門松つくり（第2日曜）
　　除夜の鐘つき（31日）（住職の手作りそば）
　　※印は近隣の3集落合同行事

この中でも、近年、新たな展開を見せているのが、5月の最終日曜に実施される茶畑再生活動・茶摘みイベントである。そもそも西垣地区は、古くから茶の産地として知られ、江戸時代には出石城へ献茶していた。戦後は、1955年に上夜久野地区門垣（かずか）集落の夜久野産業館跡に一行程16kgの製茶工場が開設され､1965年には大岶（おおさこ）地区と水坂（みさか）地区にも製茶工場ができる。1960年代後半には、直見の西垣の他、多くの集落で茶の栽培が進められ、「夜久野茶」「直見茶」として出荷された。上夜久野駅の裏手には共同製茶工場もあり、1970年代から栽培がはじまった丹波黒大豆とともに、夜久野茶は特産物だった（夜久野町史編集委員会編，2005)。1971年に上夜久野駅の裏手に一工程50kgの大型の製茶工場が開設されたものの、80年代に入ると茶を生産する農家は減少していき、上夜久野全体でも稼働している工場は上夜久野駅の共同製茶工場のみとなった。西垣地区では90年代以降、家庭内消費用の生産に限られ、出荷する農家はいなくなったと言われる。

さて、西垣地区では、中島氏の祖父母の代に茶畑が作られた。「夜久野茶」として売り出すよりも、高値で取引される綾部、宇治に持っていったという[7]。しかし、しだいに茶栽培は減少し、中島氏の親の代では茶栽培を行っていたが、10年前に茶の栽培をあきらめていた。こうした中で、茶畑再生の動きが進められたのである。

2-3. 地元住民による自主的な地域活動としての取り組み～西垣茶畑再生活動～

西垣茶畑再生活動については、小野田氏による報告資料から、その概要を示しておきたい。

①取り組みの経緯

全国的に地方の過疎化問題が顕著になる中で、西垣

地域でも同様に人口の減少、耕作放棄地の発生、世代間の交流の減少等の問題が増加してきており、集落内の景観を維持していくためにも何か新しい取り組みが必要となってきた。そこで西垣の振興のために新しい企画はできないかという、2012年度自治会長衣川秀正氏の提案のもと、集落内の月例集会で毎月様々な意見が取り交わされた。

その中で、耕作放棄地問題や集落の景観維持だけでなく、地元の歴史を再認識でき、特性を生かした活動を行っていく方が活動も長続きするし、特に高齢者たちが生きがいを持てるような取り組みになるのではないかという意見でまとまり、かつては直見茶の拠点として栄えた西垣の茶畑を整備再生する取り組みを行うことに決定した。荒廃した茶畑を整備しながら、地元住民も地域内の方から製茶技術を学び、なおかつ茶摘み体験のない都市住民に実地体験の場を提供していくことによって、地域の景観を守るだけでなく、地域内の世代間交流、都市と農村の地域間交流に貢献できることを目指したのである。

②目的

この活動は耕作放棄地の管理、景観保全だけでなく以下の目的を挙げている。

・西垣は江戸時代から茶の産地であり、出石城に献上していた歴史を持つことから、地域の歴史を学ぶことができる。

・今は放棄されているが、この茶畑を再生復活させ、茶摘みや、手作業による製茶工程を体験してもらうことで、都市住民や、地元の子どもたちへの学習の場を提供できる。茶の生産や加工過程を知ることは、人の手間をかけたものの大切さや生活の知恵を知る学習の場となりうるものと期待している。

・都市と過疎地区を結ぶ地域間交流だけでなく、地域に暮らす若い世代に、地域で埋もれた知恵を伝承していくことによって、家族間の世代交流も期待できる。

③組織の立ち上げ

活動にあたって集落内の23世帯、全世帯の住民に参加してもらう取り組みを目指すため、「西垣の魅力再発見」実行委員会を立ち上げて運営していくこととなった。

その委員の構成は、固定スタッフである実行委員長、実行副委員長（現2名）を中心に、自治会長、副会長、上組長、中組長、下組長、老人会会長、西友会（青年会）会長、子供会長、すみれ会会長（婦人会）、農区長などその年の集落内の各会の役員には必ず委員として関わってもらうように取り組んだ。

④活動（2013年度）

・2013年3月～
荒れていた茶畑を下草刈りと剪定を行う。
耕作放棄地にサツマイモを植えるため、農地を耕し、防獣用のフェンスを取り付ける。

・2013年5月18日
製茶指導。手作業による製茶工程を地元の経験のある高齢者から学ぶ。蒸し、揉み、乾燥まで。

・2013年5月26日
イベント当日は集落内40名、集落外30名、計70名が参加。
まずは、荒廃した茶畑で、この地の茶生産の歴史を地元の人から説明を受けてから、整備された茶園で茶摘み体験。
参加者70名で、2時間のうちに40kgの茶を摘み取った。
うち3kgは手作業で製茶体験をし、残りの37kgは地元の製茶工場で製茶し、参加者に後日配布する。子どもたち地元の高齢者たちに教わりながら手作業で製茶をする。
昼食はシカ肉カレーと地元で採れた山菜の天ぷらを、地元西垣地区の婦人会の皆さんに調理していただく。

・2013年6月29日
茶畑整備。刈込機による剪定作業。

・2013年8月31日
茶畑整備。下草刈り、施肥。

・2013年10月26日
サツマイモ掘りイベント。婦人会による焼き芋の準備。

・2013年11月30日
防獣対策用ネット張
※当初は近年まで整備されていた茶畑を借り受けて茶摘みを行ったが、2015年からは自ら整備した茶畑で茶摘みができるようになった。

⑤活動の意義、特徴

この活動の最も大きな特徴は、地元住民による自主的な活動であるということがあげられる。前自治会長中島頼孝氏の報告にもあったが、この集落は年間の活

動行事が多く、常に様々な地域内の問題意識を住民間で共有していることが、自主的な活動につながっているのではないかと思われる。他地域と比較しても、この集落は住民の結束が強く、集落の環境保全や将来に対して高い意識を持っているのである。活動の当初は京都府の「ふるさと保全活動」の補助金を受けていたが、この補助金がなくとも活動をしていくかどうかということが、月例集会で議題にあがり、自治会から費用を捻出してでも行いたいということが確認されたことは、活動を維持継続していくうえで、非常に心強いことであった。

また活動の実行委員長に地域の寺院の住職である中島正泰氏に就任していただいた。寺院でも様々な独自の交流事業を実施しているなど、氏の地域貢献に対する意識は非常に高いものがある。また各世代のパイプ役として意見を取りまとめる労苦を常に買って出ていただいているので、よりよい環境の中で活動することができているように思う。

このようにこの西垣地区では、住民一人一人の地域貢献への意識が強いため、活動を支える屋台骨が強固なものであることが、あらゆる世代の住民が気軽に、そして楽しみをもって参加できる状況を作り上げているのではないかと思われる。

また、住民が楽しみをもってかかわってくれるからこそ、多くの参加者にも心から喜んでもらえ、活動の目標に掲げている「地域の産業基盤であった放棄茶畑を再活用することで、地域に眠っていた歴史を甦らせる」ことや、「地元の年配者が持っている手作業の技術を伝承していくことで、地域の誇りを再認識してもらう」ことなどが達成でき、地域内の世代間交流と、都市と農村との地域間交流に貢献する魅力あるイベントができるようになっていくのではないだろうか。

⑥活動内容の現状・課題・さらなる展開に向けて

・単に新しいことに取り組むのではなく、地域の歴史性を引き出す。→高齢者が参加しやすくなる。
・地元住民のあらゆる世代に役割をもたせる。→地元住民の全員参加を促す。
・地域に眠る先人の知恵を引き出すことによって高齢者に生きがいを与える。→家族間の世代間交流を促す。
・都市住民には学習の場となりうるものを提供する→イベントのリピーターを確保する。
・常に柔軟な対応に心がける→地域住民を主役に引き立てることで、安定した活動ができる。
・必ず会報を作り、地元民に配布する→活動を目に見える形にすることで、参加してくれた人々に達成感を与え、やる気を維持させる。

⑦今後の展望

西垣集落には、西国三十三観音巡礼の古道が通っており、巡礼道関連の石碑や石仏も多い。また、集落を見渡す見晴らしのよい高台に、戦後すぐ廃寺になった高源寺の跡地が荒れたままになっている。これを整備して有効利用しようという動きが住民の間から出てきた。このように住民の方から意欲的に意見が出てくるということは本当の活性化に向けた大きな前進なのではないかと思われる。

以上が西垣地区茶畑再生活動の概要である。この内容は2014年6月18日に愛知県立大学で行われた地域社会学の講義でも紹介され、学生からの質問に対して、報告した小野田氏により、次のような意義が語られた。

「このような地域の歴史を活かすことが重要ではないかとの意見がいくつかありましたが、その通りだと思います。地元の歴史を再認識してもらうことによって、地元の誇りを取り戻すことができるのではないかと思っています。

例えば、授業でもお話した夜久野町西垣地区の茶畑再生活動では、放棄された茶畑復活に取り組み、手作業による製茶をイベントで行うことで、実際に労働経験のある高齢者にいろいろと指導を仰ぐことになり、そのため自然と高齢者も参加しやすくなります。集落のおじいさん、おばあさんは喜んでいろいろと教えてくれますし、そのときの生き生きとした笑顔を見ていると、それだけでこの取り組みの意義はあるのかなと思えてきます。

またこの地域では、茶畑の取り組みが始まったことによって、住民意識が結束し、集落内にある戦後廃寺になった跡地を再利用しようという動きも出てきました。その場所は集落を見下ろす眺めの良いロケーションで時折雲海も発生する場所なのですが、竹林が荒れ放題で、これをどう活用していくのかも住民にとって長年の課題でした。そこでこの地域の歴史とその寺院を調べてみますと、この集落には西国三十三観音巡礼の古道が通っていますし、その寺院も巡礼に少しは関

わりのあることがわかりました。またこの集落の先は峠になっていますので、峠の茶屋として昔はここも栄えたのかもしれません。そこで、将来的にこの寺院跡地に竹の間伐材を使って見晴らし台と作って茶畑再生と関連させて、地元の茶葉を「巡礼茶」と名付け、来訪者にこの見晴らし台で休んでもらいながら、地元で生産したお茶を飲んでもらうようになっていったとしたら面白いかと思います。

このように住民のアイディアに、地域の歴史性を絡めていくと、活動意義が明確になり、様々な年齢層の住民、特に高齢層の人たちが意欲的に関わってくれるようになる可能性が高くなります。また最初に述べたように、地域の歴史を知ることによって、過去から未来へ繋がりを持てるということは住民にとっても大切なのではないかと思います。」

3. さらなる集落支援の展開

3-1. 集落支援員としての活動

福知山市は市域面積55,257haで、そのうち林野面積が76％を占める。全農地面積の50％以上が中山間地で、30％は条件の不利な農地となっている。

過疎化問題対策として、2008年度より「豊かな文化歴史自然に包まれ安心して暮らせるふくちの農山村」を基本目標に、農山村活性化計画が策定されており、様々な地域の課題に取り組んでいる。2011年度からは、下記の要件を満たす過疎地域のために「ふくちの農山村応援事業」が実施されている。この事業は、いわゆる「限界集落」と呼ばれる地域のために、特別枠を設けて、地域、および集落の活性化を支援していこうという試みである。

選定基準

①年齢的要件

「65歳以上の方が集落人口の50％を占める集落」

②人口規模的要件

「人口が概ね50人未満の集落」

③地理的要件

「周囲から孤立しているなどの地理的条件が厳しい集落」

集落内で、集落の活性化のために企画・申請された事業に対し、年間、1集落あたり10万円の補助金（100％補助率）を支給する。この制度に該当する事業内容としては、農産業の振興、農地の保全、放棄耕作地対策、有害鳥獣対策、緊急時避難の支援体制、集落施設の維持管理、環境景観の維持管理、地域のPR活動等があげられる。

この「ふくちの農山村応援事業」は実施当初の2011～2012年度には、市役所の職員が対応してきたが、2013年度から、外部から2名の集落支援員[8]を設置し、対策を推進していくようになった。この2名のうちの1人が小野田氏である。それによって、「応援事業」の取り組み集落が8集落から22集落に増加した。2013年は市内の25集落が要件を満たしている。

図1：福知山市ふくちの里づくり支援員活動フロー

各集落の現状調査

各集落を点検、巡回（聞き取り）し、現状を調査する

↓

課題の把握・抽出

各集落の課題や問題点を把握、抽出する。

↓

目標設定

集落の活性化を進めるにはどうすればよいのか

↓

目標達成のための相談・行動

目標を達成させるための助言や手助けを行う

↓

成果とりまとめ

聞き取り、アンケートにより成果をまとめる

↓

支援計画の作成

各集落において、今後どのように支援していけばよいか計画を立てる

図2：各集落の「ふくちの農山村応援事業」取組状況

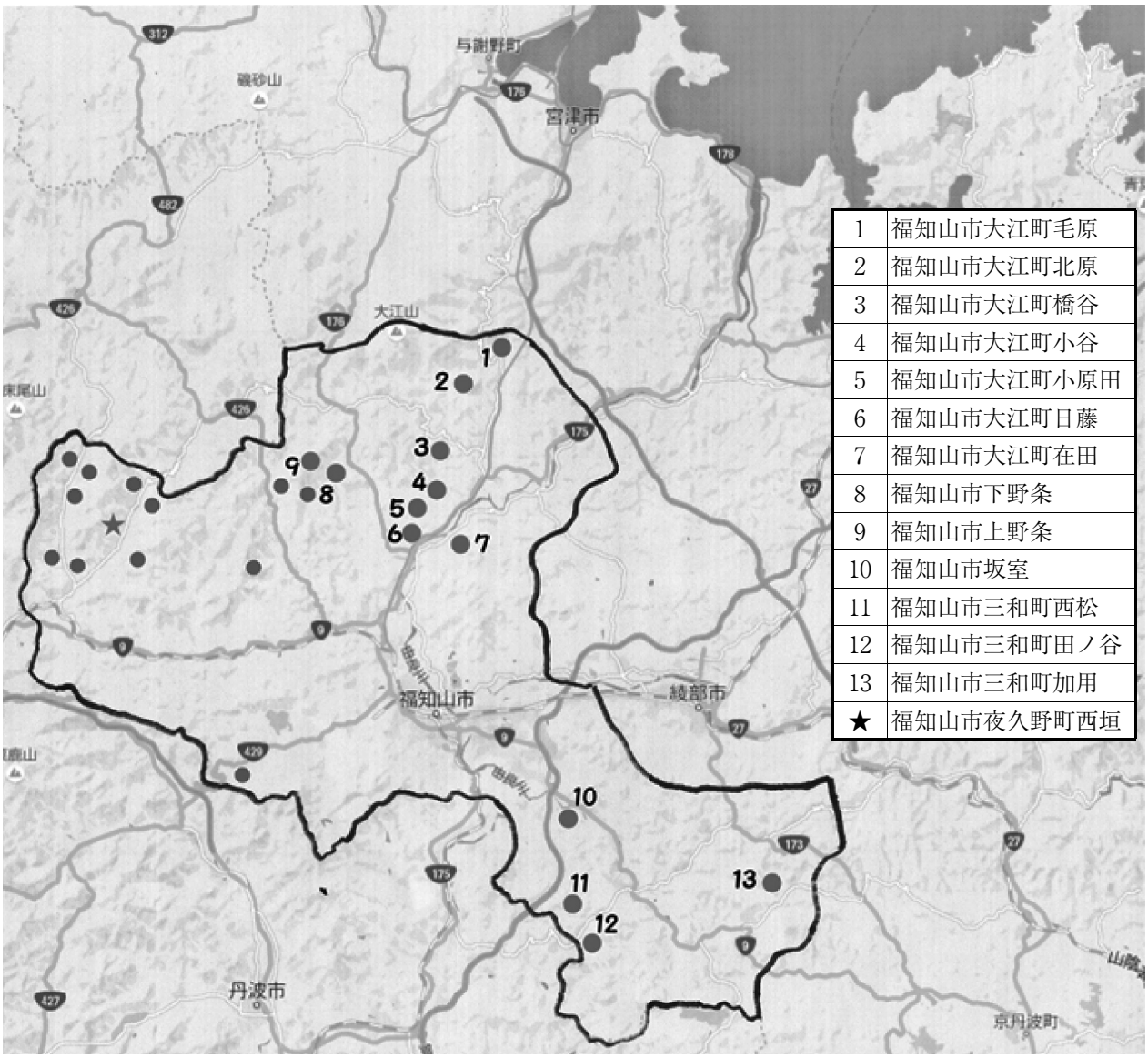

表3：各集落の「ふくちの農山村応援事業」取組状況

			世帯数	人　口	2013年度取組	2014年度取組
1	旧大江町	毛原	16	31	棚田体感ツアー	棚田体感ツアー
2		北原	8	13	地区マップ（パンフレット作成）	地区マップ（パンフレット作成）
3		橋谷	22	34	－	防災備品倉庫の修繕
4		小谷	9	13	畳の張り替え	大型ストーブ、防災グッズの購入
5		小原田	39	77	防災グッズ購入	玄関と屋根の修繕
6		日藤	9	17	－	－
7		在田	22	40	畳の張り替え	会議机といすの購入
8	旧福知山市	下野条	25	57	雨樋の修繕	公民館の電球のLED化
9		上野条	20	36	絵手紙教室他	絵手紙教室他
10		坂室	8	37	防獣網の設置	防獣網の設置
11	旧三和町	西松	25	55	窓のサッシ化	エアコンの設置
12		田ノ谷	8	17	防獣用檻の購入設置	公民館周辺の整備
13		加用	7	13	紫ずきん共同栽培	紫ずきん共同栽培

3-2. 集落支援の課題

集落の課題としては、住民のあきらめてしまっている意識が大きな課題と考えられる。これには過疎化集落の住民の持つ疎外感が大きく関与しているように思われる。行政からの目配りが行き届かず、住民の声が汲み上げられないのではという疎外感が蔓延している。住民の数が少ないので、要望が聞き入れられるのは後回しになっているのではないかという声が多く聞かれる。

また、子どもたちが都市部で就職し、定年を迎えても帰ってこないため人口の減少に歯止めがかからず、活性化に向けた取り組みをしても無駄と思い込んでしまっている、もしくはとにかく人間の数が足らず、集落内の新規事業に取り組む余裕がないといったように、集落の未来に対して後ろ向きな姿勢ばかりが目立つ状況である。

これに対し、行政は制度作りばかりに力を入れすぎて、集落が制度を取り組めない実情にまで目配りできていないのではないかと考えられる。このような集落では、制度を取り組むスタートラインに立てない状況にあるということを知るべきなのであるが、行政側は自らの制度に対し数字重視の、いわゆる「拙速な成果」を求めすぎているように思われる。集落支援員が、集落の住民の話を聞き、時には集会等に参加させてもらいながら、この応援事業の企画をつくってもらうように働きかけているが、小野田氏が13集落を担当したうち、11集落が当事業の取り組みを行った。多くは集会所、公民館等公共施設の備品、改修等に使用した例が多く、住民主体で活動する新規事業の取り組みは少ない。このような状況の中で、1年や2年という期間での関わりでは数字に表れるような成果は望めないので、取り組みの姿勢や問題意識の改革などもっと数字に表れない成果にも目を向けるべきと考えている。

また事業の取り組みを行った11集落中4集落は、田植え体験ツアーの実施、集落新聞の発行、集落内で絵手紙教室の開催等、何かの参加型事業に取り組んでいるが、これらの集落は、この制度ができる以前から、様々な活動を行っていたところである。それら地域の特徴は、この4集落中3集落は、Ｉターンの移住者が中心となって企画、活動を実施している地域であることがあげられる。このように集落へ移住してきた人々の方が、取り組みに対する意識が高い。移住者に、活性化への意識を持ってもらうような仕組み作りが必要なのではないかと思われる。しかしすべての移住者がその地域にフィットするわけではなく、移住者側にもいかに地域に解け込んでいくかというハードルも課されている。

4. まとめにかえて

以上、福知山市夜久野町西垣地区における集落活動の展開から、その活動の意義と展開可能性について議論してきた。

地域の再生、内発的発展をテーマにした愛知県立大学の講義（2014年6月18日）では、小野田氏に、この集落活動の実践に根ざした取り組みを紹介していただいた。その際、「限界集落を特別に支援することに疑問がある。特別に手をかける必要があるのか、住民が集落の消滅を受け入れているのならば、取り組みが必要とは思えない。地域でのイベントは本当に地域の活性化につながるのか」（3年生）という疑問が投げかけられた。

これに対して小野田氏は次のように回答している。

「厳しい意見ですが、私も集落支援の仕事に取り組んで、この問題を常に自分に問いかけています。彼らの日常生活に入り込んで、いろいろな取り組みをお手伝いするわけですが、授業で話したように、なかなか集落の住民が前向きになってもらえないところでは、本当にこのような支援の意味はあるのかな、という疑問がないわけではありません。

近年、若手の経済学者の多くは、人々が都市部に流入していくのは、そこに仕事がある、もしくは生活が成り立つからで、過疎地域の人口が減少するのは現在社会の仕組みでは自然なことなので、過疎地域問題に税金を投じるのはやめて、都市部の就労問題、もしくは福祉関係に回した方が有効なのではないか、という意見を持っています。またその一方で過疎地域がまったく消滅してしまうと、里山が荒れ、都市部に治水問題や、水質汚染問題等、様々な問題が増加し、これらの対策に莫大な費用が掛かるのではないかともいう学者もいます。

確かになかなか答えの見えない難しい問題ですが、私は以下のように考えています。これからの時代は価値観の多様性が大きなポイントになってくるような気がしています。単に経済性重視の価値観から、いろんな価値観が認められるような社会になってきたときに、日本の田舎の中に、何か重要なものがあることが見いだせるのではないかと考えていますが、まったく

消滅してしまって『0』になってしまったら、復活させることは非常に難しいですし、コストも余計にかかります。ですので、今できることで手を打っておかないと、完全に消滅してしまったら価値を見出すこともできません。

過疎化地域の多くは自然と共生することで成り立っています。この自然の恩恵をいかに大切なものと実感できるかということは、私たちに（都市部で暮らす人たちにも）必要不可決なものだと思っています。ですので、田舎の暮らしに興味を持つ若者が増えてきてもらうと、もっと価値観の多様性が広がって、社会全体がおもしろくなっていくのではないかと思うのです。

このような感想を書いてくれた人のように、話を鵜呑みにして聞くだけでなく、きちんと反論できたり自分の意見を言えたりするということは素晴らしいことだと思います。私もこのような意見を持っている人たちが納得できるように、いろんなアイディアを実践していきたいと思っています。」

この小野田氏の回答からは、「限界集落」とされる地域の内部の問題というよりも、むしろ過疎の地域に対するまなざし自体を問い直し、内部の価値を再発見していく道筋を模索していることがわかるだろう。ここからは、「限界集落」、「地方消滅」、「地方創生」として語られる農山村において、地域の活動の中で生まれてくるもの、その歴史性からしっかり問い直していく志向を読み取ることができる。それは、先に確認したような、近年の「地方消滅」をめぐる議論に対して、地域の動きを拙速に「成功」／「失敗」と評価を下すことなく、そのプロセスの持つ意味を丁寧に検証していくことである。こうした作業から、「地方消滅」やむなしとする声にも応えうる可能性が見出されるのではないだろうか。

本稿はあくまでも中間報告的なものである。今後は、集落の取り組みの詳細について、さらに継続的な調査を続け、現在実施している綾部市のＩターン者調査[9]と比較しつつ、この課題をさらに追求していきたい。

＜付記＞

本稿は、JSPS 科研費26285112の助成を受けたものである。

また、調査でお世話になりました夜久野町のみなさま、「西垣の魅力再発見！」実行委員長の中島正泰氏には記して感謝申し上げます。

注

*1 福知山市夜久野町西垣地区前自治会長

*2 檀王法林寺研究員、福知山市集落支援員、愛知県立大学非常勤講師

*3 愛知県立大学教育福祉学部准教授

1）本稿は、中島氏、小野田氏の報告資料をもとに、松宮が加筆・調整したものである。

2）本研究は、「地方の社会的解体危機に抗する『地域生活文化圏』形成の可能性」（研究代表：西村雄郎広島大学教授）の一部であり、内発的に形成しているサスティナブルな地域生活圏である綾部の＜地域生活文化圏＞を対象としている。執筆者のひとり松宮の福知山市夜久野町へのかかわりは、2005年9月、小野田豪介氏より夜久野町での集落の取り組みを体験してみてはという誘いによるものだった。松宮は「見かけん顔だな」と声をかけられつつ、ぎこちなく手刈り作業に加わらせていただきながら、農業をめぐる現状、集落間の競争の話し、集落活動について多くをご教示いただいた。「先生かもしれないが、ここではこっちが先生」と幾分冗談めかしてはいたが、集落活動を学べという熱い心意気にどれだけこたえることができるかを意識し、2014年度から本格的な共同研究を進めることとなった。

3）地方消滅論に対しては、すでに多くの批判が寄せられている。一元的な予測指標の妥当性を含む人口予測の問題、周辺を切り捨てる「選択と集中」という政策的意図などが批判のポイントであるが、特に社会学の側からは、地方消滅論が地域の活力を奪うという言説レベルの問題だけでなく、家族・親族ネットワークによる集落存続の可能性、地方への移住傾向などの実証的な知見に基づく反論が積み重ねられてきている（山下，2014；徳野，2015；宮下，2015）。

4）日本創成会議ホームページ http://www.policycouncil.jp/、2015年10月13日最終確認。

5）ここでの「創発」は、次の内発的発展論に対する吉原直樹の批判的な指摘を念頭において使用している。「内発的発展は、人と人、人と物の『あいだ』に先験的に存在するもの（いわば固定化した伝統）を前提にしているようにみえる。『そこから立ちあらわれてくるもの』に焦点化されているのである。それは一見、ここでいう創発態と相同的であるよう

にみえるが、やはり『あいだ』からプロセスとしてあらわれる創発態とは似て非なるものである。むしろその点では、内発的発展は『内面化された起源』にこだわるマッシーのいう『進歩的な場所感覚』と響き合っているかもしれない」（吉原，2008：264-265）。

6）荒木俊馬元京都帝国大学宇宙物理学教授は、戦後10年ほど上夜久野村平野に移住し、農業に従事した（夜久野町史編集委員会編，2005）。この時期に執筆された『大宇宙の旅』に影響を受け、松本零士氏が『銀河鉄道999』を執筆したという。

7）これは合併前の旧福知山市の茶についても同様である（安藤，2012）。

8）地域の実情に詳しく、集落対策の推進に関して知見を有した人材が、地方自治体からの委託を受け、市町村職員と連携し、集落への「目配り」として集落の巡回、状況の把握等を実施している。2011年では全国に専任では約300人設置されている。

9）現在、鰺坂学同志社大学教授を代表として、「半農半Ｘ」やＩターンで注目が高まる綾部市（塩見，2008）の調査を継続中である。

＜文献＞

安藤隆一，2012，「中心と周縁の都市論」井口貢・池上惇編著『京都･観光文化への招待』ミネルヴァ書房.

小田切徳美，2014，『農山村は消滅しない』岩波書店.

塩見直紀，2008，『半農半Ｘという生き方』ソニー・マガジンズ.

徳野貞雄，2015，「『人口ダム論』と農山村集落の維持･存続」『都市問題』106(7)：44-54.

原山浩介，2009，「農村社会を規定する『多様性の政治』」平野敏政編著『家族・都市・村落生活の近現代』慶應義塾大学出版会.

古谷千絵，2008，「農村地域における地産地消・食育・農村振興トライアングルの実際」『地域政策研究』43：48-54.

増田寛也編著，2014，『地方消滅』中央公論新社.

増田寛也・冨山和彦，2015，『地方消滅　創生戦略編』中央公論新社.

松下卓充，2010，「財政状況及び新市建設計画からみた合併後の福知山市の現状と課題」『京都自治研究』3：1-17.

松宮朝，2010，「『当事者ではない』人間に何ができるのか？」宮内洋・好井裕明編著『＜当事者＞をめぐる社会学』北大路書房.

宮下聖史，2015，「『人口減少社会』の地域政策・地域づくりに関する一考察」『長野大学紀要』36(3)：143-155.

新原道信，1991，「地域の内発的発展の先行条件に関する一考察」『千葉大学人文研究』20：27-64.

夜久野町史編集委員会編，2005，『夜久野町史　第一巻～第四巻』.

夜久野町商工会，2006，「都市農村交流の町をめざして」『パワフル関西』443：40-43.

吉原直樹，2008，『モビリティと場所』東京大学出版会.

米山俊直，1989，『小盆地宇宙と日本文化』岩波書店.